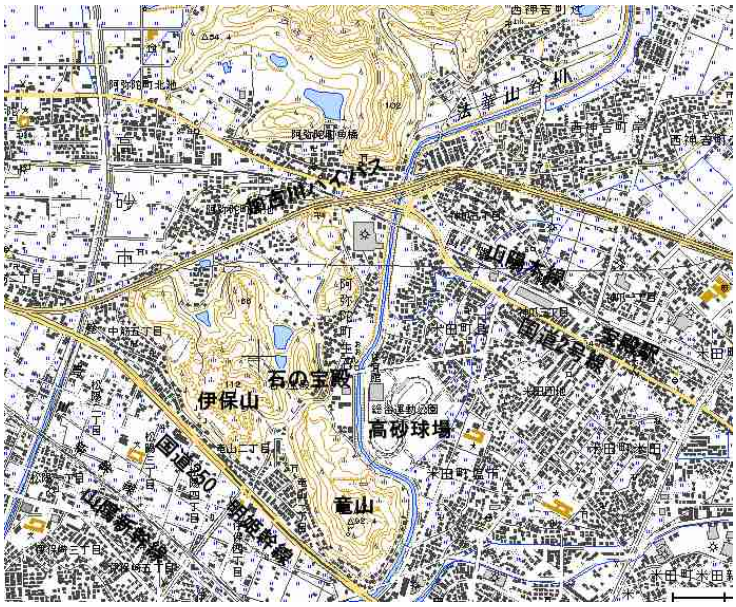
2、 資料に見る古代の石切りの郷「生石」-石の宝殿・竜山石概説- インターネット検索ほか

生石の郷 法華山谷川

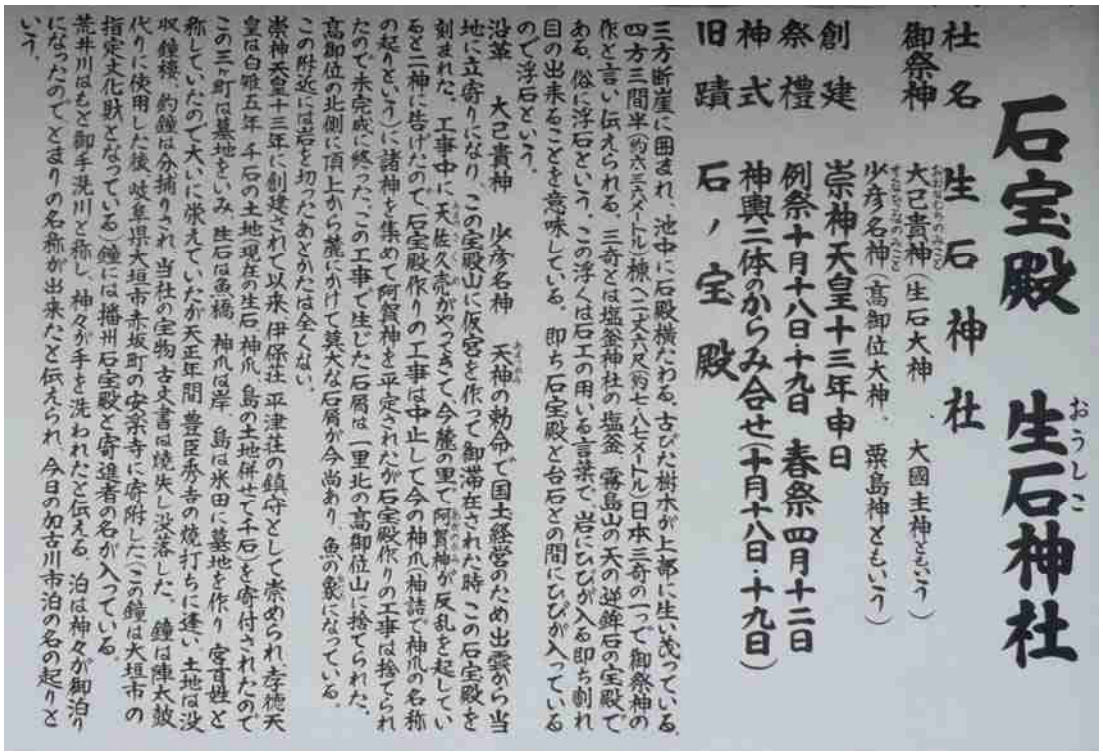
生石神社 石の宝殿



古代からの石切りの郷　　生石の郷

● 石の宝殿 ＆ 生石の郷 の由来

1. 生石神社 社伝による石の宝殿の由来



石宝殿　生石神社

社名　生石神社

御祭神　大己貴神（生石大神　大國主神ともいう）
少彦名神（高御位大神、粟島神ともいう）

創建　崇神天皇十三年申日

祭礼　例祭十月十八日・十九日　春祭四月十二日

神式　神輿二体のからみ合せ（十月十八日・十九日）

旧蹟　石ノ宝殿

三方断崖に囲まれ、池中に石殿横たわる。古びた樹木が上部に生い茂っている。四方三間半（約六三六メートル）棟（二丈六六尺（約七・八七メートル）日本三奇の一つで御祭神の作と言い伝えられる。三奇とは塩釜神社の塩釜、霧島山の天の逆鉾石の宝殿である。俗に浮石という。この浮くは石工の用いる言葉で、岩にひびが入る即ち割れ目の出来ることを意味している。即ち石宝殿と台石との間にひびが入っているので浮石という。

沿革　大己貴神　少彦名神　天神の勅命で国土経営のため出雲から当地に立寄りになり、この宝殿山に仮宮を作って御滞在された時、この石宝殿を刻まれた。工事中に天佐久売がやってきて、今龍の里で阿賀神が反乱を起していると二神に告げたので、石宝殿作りの工事は中止して今の神爪（神詰で神爪の名称の起りという）に諸神を集めて阿賀神を平定されたが石宝殿作りの工事は捨てられたので未完成に終った。この工事で生じた石屑は（里北の高御位山に捨てられた。高御位の北側に頂上から麓にかけて莫大な石屑が今尚あり、魚の象になっている。この附近には岩を切ったあとがたは全くない。

崇神天皇十三年に創建されて以来、伊保社、平津社の鎮守として崇められ、孝徳天皇は白雉五年、千石の土地現在の生石、神爪、島の土地併せて千石）を寄付されたのでこの三ヶ町は墓地をいみ、生石は魚鶴、神爪は岸、島は氷田に墓地を作り、宮司姓と称していたので大いに栄えていたが天正年間、豊臣秀吉の焼打ちに逢い、土地は没収、鐘楼、釣鐘は分捕りされ、当社の宝物、古文書は焼失し、没落した。鐘は陣太鼓代りに使用した後、岐阜県大垣市赤坂町の安楽寺に寄附した（この鐘は大垣市の指定文化財となっている）鐘には播州石宝殿と寄進者の名が入っている。荒井川はもと御手洗川と称し、神々が手を洗われたと伝える。泊は神々が御泊りになったのでとまりの名称が出来たと伝えられ、今日の加古川市泊の名の起りという。

2. 播磨風土記に記載された生石の郷

大国の里　土は中の中。 大国とよぶわけは、百姓の家が多くここにたむろしていた。だから大国という。

この里に山があり、その山を伊保山という。仲哀天皇を神と奉り、神功皇后は石作連大来を連れて讃岐の国の羽若の地の石をお求めになられた。その地から海を渡って来られて、まだ御廬をお定めにならなかったとき、大来が（絶好の地を）見出してみんなに知らせた。だから美保山という。山の西に原がある。名を池之原という。原の中に池がある。だから池之原という。

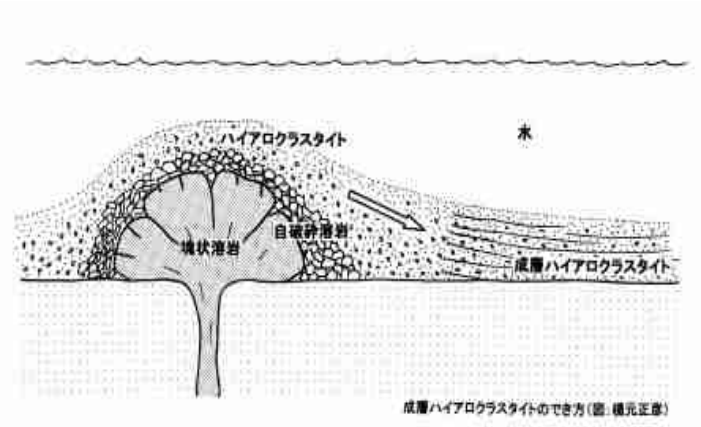
原の南に石の造作物がある。 その形は家屋の如くで、長さは二丈、巾は一丈五尺で、高さも同様である。その名号を大石という。

言い伝えによると、聖徳の王の御代に弓削大連（物部守屋）が作った石である。

● 竜山石（宝殿石）学名　流紋岩質溶結凝灰岩の解説

兵庫県の加古川下流右岸に産する流紋岩質溶結凝灰岩の石材の呼称で、白亜紀後期（約 7000 万年前）の火山活動によって噴出した火砕流堆積物が厚く堆積したもの。

古墳時代、畿内の大王や豪族などの石館にも数多く使われており、7 世紀頃に造られたと考えられる“石の宝殿”は宝殿山の中腹にある約 500 トンの浮石で、生石神社の祭神として祭られ、江戸時代の末、シーボルトも訪れヨーロッパに紹介されている。古墳時代中期には、畿内の権力者のほとんどの石棺にこの竜山石が使われ、「大王の石」と称されました。



成層ハイアロクラスタイトのでき方（図：横元正彦）

古墳時代中期の石棺はほとんどが６枚の板石を組み合わせてつくられた「長持形石棺」。

古墳時代後期には、この石から「家形石棺」がつくられた。この頃は、地方の豪族や有力者の墓にも数多く利用された。

鎌倉～室町時代には、五輪塔や宝篋印塔など、江戸時代の初期には姫路城の石垣などにも利用された。

明治以降には、旧造幣局鋳造所（1870 年）や住友銀行本店ビル（1922 年）、京都ホテル旧館（1928 年）など、近代建築物などの壁材として利用された。

竜山石の採掘は今も続けられ、河川や公園などの石垣、モニュメントや花壇の縁取り石など、建築用や造園用に広く利用されている。

高砂市ホームページより

● 石の宝殿　概説

岩山をくり抜いた穴にほぼ直方体の巨石が池に浮いたように鎮座する石の宝殿（生石神社裏手）と南側 400m には
日本三奇の一つ生石神社の裏手に鎮座する切妻風の突起を後ろにして家を横たえたような横 6.4m、高さ 5.7m、奥行 7.2m の巨大な石造物がある。「石の宝殿」と呼ばれ、水面に浮かんでいるように見えるところから「浮石」ともいわれていますが、多くの謎につつまれ、 いつ、誰が、何のために作ったのか、不思議な石造物。
また、すぐ南側には 古くは仁徳天皇陵の石棺など数々の石棺にも使用された軟質で加工しやすい竜山石（宝殿石）の採石場があり、壮大に岩肌を垂直に覗かせた風景を眺められる。

生石神社の社伝によると、

「神代の昔　大己貴命（大国主命）と少彦名神が出雲国から播磨国に来た際に石の宮殿を造ろうとして一夜のうちに現在の形まで造ったが、途中で播磨の土着の神の反乱が起こり、宮殿造営を止めて反乱を鎮圧した。しかし、夜が明け夜明けとなり此の宮殿を正面に起こすことが出来なかったが、「たとえ此の社が未完成になっても、霊はこの石に籠もり　永遠に国土を鎮めん」と言われたと伝えられ、それ以来此の宮殿を「石の宝殿」、「鎮の石室」と称している」

と伝えられている。

この石室は、三間半（約７メートル）四方で棟丈は二丈六尺（約６メートル）の三方岩壁に囲まれた巨岩の宮殿で、池中に東西に横たわって浮く姿である。この工事に依って生じた屑石の量たるや又莫大であると推察され、一里北に在る霊峰高御位山の北側に大量にある屑石がそれであるとも言われている。
池中の水は如何なる旱魃にも渇することなく海水の満干を表わす霊水と言われている。

● 石の宝殿　播磨風土記の記述　記紀には記載がない

播磨風土記の印南の郡大国の里の条には、以下の話が記載されている。
『原の南に、石の造作物がある。その形は家屋の如くで、長さは二丈、幅は一丈五尺で高さも同様である。
その名号を大石という。言い伝えによると聖徳大王の御代に弓削の大連が作った石であるという。』

また、この石の宝殿とそっくりな石造物、「益田岩船」（推定 800t、高さ 4.7m以上、横 11m、奥行き 7.2m、標高約 130m）が奈良県橿原市の橿原ニュータウン内、白橿南小学校の西の丘陵（岩船山）の頂上付近にある。 初期大和の中心部葛城と明日香を分ける丘陵地の丘の上である。完成すれば、ほぼ同じ形状となり、横倒しの状態での製作、見晴らしのいい丘の中腹の設置場所などの条件もほぼ同じである。本当に謎の石造物である。
また、この播磨と大和のつながりについても　イメージがさらに広がってゆく。

● 竜山石　補足　　インターネット検索整理

この竜山石には3つの色がある。

「青竜石」、もっとも変質の程度が低いもの

「黄竜石」、風化によって基質に微細な水酸化鉄が広がったもの

「赤竜石」　岩石の固結末期に節理に沿って上昇したマグマ残液の熱水によって熱せられ
白雲母や方解石ができてその周りに酸化鉄ができたもの

加古川東高校地学部が日本地質学会2008秋田大会「小さなEarth Scientistの集い」優秀賞受賞研究より

竜山石「黄」

竜山石「青」

竜山石「赤」

竜山や伊保山の石切場の崖は、竜山石の大きな露頭。少し離れてこの崖を見ると、淡緑色の層の間に、濃緑色の層が数ｃｍの厚さで平行にはさまれる縞模様が平行に入っている。

淡緑色の部分には、数ｃｍ～数mmの大きさの白い流紋岩の岩片が多く入っており、濃緑色の部分には、この流紋岩の岩片がほとんど含まれておらず、長石の結晶片が白く点々と含まれている。竜山石には柱状節理がほとんど見られないことから、水中で形成されたもの（カルデラ湖の中で再度火山活動がおこり、火砕流が発生）

石切場の風景

石切場に見られる成層構造

淡緑色の基質の中に、それより少し濃い緑色の流紋岩の岩片が点在。この流紋岩の岩片は、不規則な外形をしたものとフレーク状のものがある（最大15㎜）。

流紋岩の岩片と基質との境界はシャープですが、岩片の外形は複雑に入り組んでいます。流紋岩の岩片はガラス質で、流理構造を示すものも見られます。また、石英と斜長石の斑晶を少量含んでいます。岩片は雑然と散在していますが、フレーク状のものは平行に並ぶ傾向があります。流紋岩以外に、軽石や黒色の泥岩を岩片として少量含んでいます。　基質は、細粒で緻密、石英と黄褐色に色づいた斜長石の結晶片を含んでいます。

竜山石の研磨面（写真横７ｃｍ）

青竜石（横10.5cm）

黄竜石（横11.5cm）

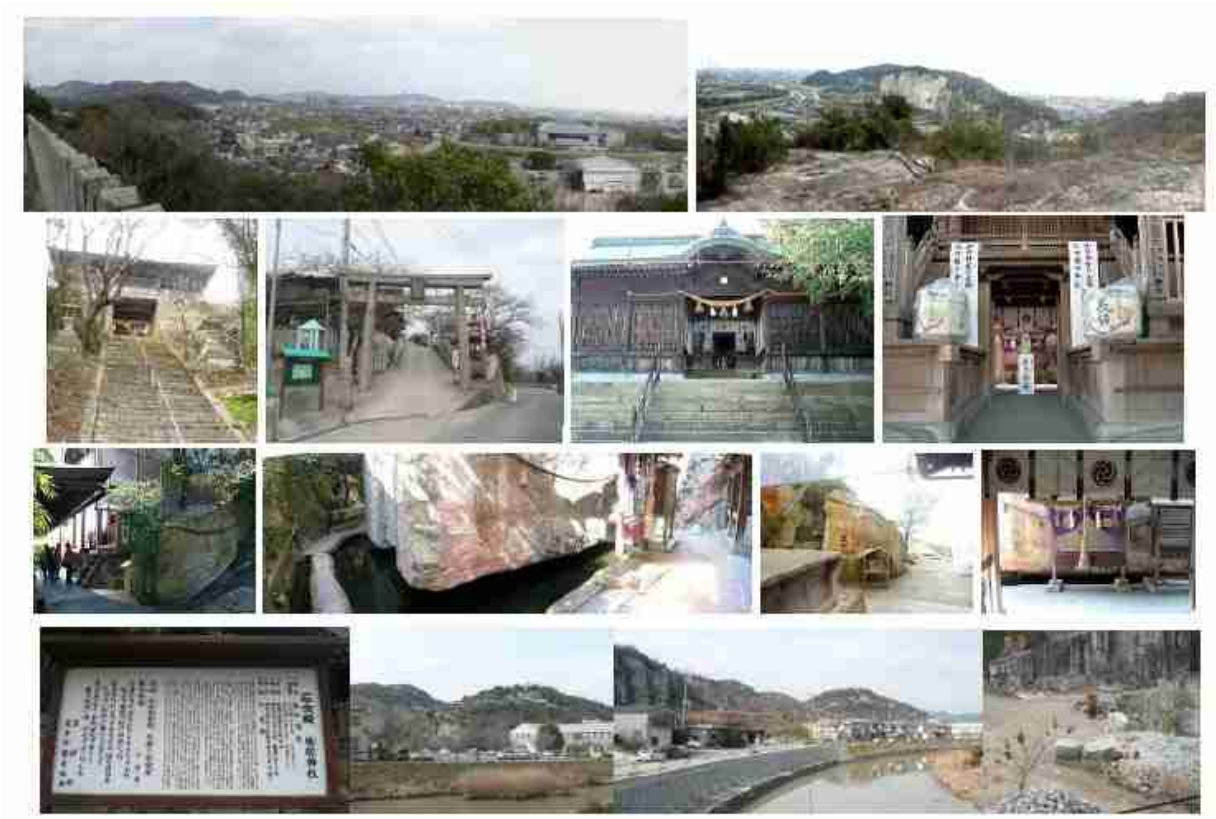
● 竜山石の使われているところの例

雲部車塚古墳(篠山市)の長持形石棺(5 世紀)
復元したもの(兵庫県立考古博物館)

曽根天満宮の石橋　1723(享保 8)

高砂海浜公園のモニュメント

倉敷　大原美術館の礎石　1930(昭和 5)



生石の郷 と 石の宝殿 生石神社　2009.2.27.